日本一の学校を目指して
－初代校長先生とその教育方針－

皆さんは、この４月から晴れて湘南高校生となります。湘南高校には、その前身である湘南中学時代を含めて、90 年の歴史があります。その歴史の歩みはどんなものであったか、それを知ることは、これから３年間、ここで学ぼうとする皆さんにとっての、良き道標となるに違いありません。総てを語ることはできませんが、ここでは、開校から戦後の新制湘南高校へ引き継がれるまでの旧制湘南中学時代を中心に、その歩みの概略を紹介します。

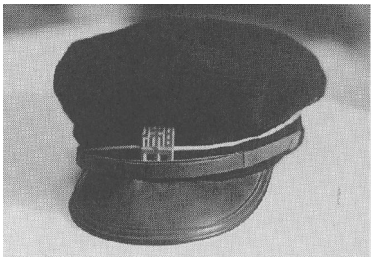
＊ 学校創設

県立湘南中学は 1921 年（大正 10 年）ここ藤沢の地に開校されました。その時の施設はといえば、丘の上にぽつんと建つ校舎一棟だけのものでした。そこで、校長先生以下、１期生 125 名と教師６名、他数名の職員によって、現在に至る湘南中学・高校の歴史の一歩が踏み出されました。

＊ 初代校長

玄関脇の「赤木苑」に建つ胸像、それが初代校長、赤木愛太郎先生です。先生は、新潟県長岡女子師範学校校長在職２年という時、神奈川県の強い要請によってこの藤沢の地に赴任してこられました。時に、先生は 48 歳でした。そして、戦後、新制の湘南高校に変わる直前までの 27 年の長いあいだ、学校長として、わが校の基礎期から発展期への道筋を確立されました。ですから、湘南中学の歴史を語ることは、即ち、赤木先生を語ることでもあるのです。

＊ 日本一の学校を目指して



神奈川県における中学校は、本校開校以前、既に現在の希望ヶ丘を初めとして、小田原、厚木、横須賀、翠嵐の５校があり、その各学校は、それぞれの地域で立派な成果を挙げていました。赤木先生は、こうした既設校に遅れを取ってはならぬ、負けてなるものかの思いのもと、湘南中学を「日本一の学校」にするという強い信念から、創立２年目に、学帽に一筋の白線を入れ、全生徒に、何時どこにいても「日本一」の湘中生たるの自覚を促しました。この白線は、校舎から望まれる秀麗富士の白い雪の稜線を象徴したものでした。湘南は気候温暖・風光明媚な土地柄から、ともすれば安逸に流れ、克己心に欠けることを先生は心配し、生徒たちに常に「質実剛健」「勤勉力行」たれと諭し、服装も木綿の学生服で、贅沢を許しませんでした。

「県下一」でなく「日本一」と言うところが、まさに赤木先生の面目躍如たるところで、高邁な精神をうかがうことができます。あくまでも目標は「日本一の学校」。教師も生徒もそれを合言葉に勉学に励んだことは言うまでもありません。それを成し遂げるためには、先ず有能な教師集団と、施設設備の充実が欠かせませんでした。

＊　有能な講師招聘

　しかし、創設当初は生徒も少なく、限られた予算の中で、専任を多く採用するわけにはいきません。そこで、講師の先生を多くして、それぞれ専門の教科だけを持ってもらうことにしました。そのために、赤木先生自ら良い講師を求めて大奔走。その結果、各分野で活躍中の多くの優れた人材を、広く集めることができました。当時を知る人からは、「公立中学であれだけの教授陣容を整えたのは、まさに天下の偉観」とまで言われました。

＊　自らの手でプール建設

　施設設備に関しても少ない予算の中でいろいろ工夫をこらしました。最初に着手したのはプールの建設でした。月々集めていた生徒の拠出金と篤志家の寄付をもとに、1930 年（昭和５年）の夏休みに、職員、生徒、卒業生の有志の人海戦術で遂にプールを完成させました。現在のプールとほぼ同じ場所です。形式や観念に捉われず、実践を通して悟らせるというのが先生ならではの教育方法でした。その翌年の運動場の拡張などもこうした精神で着々と整備されていきました。

プール砂掘共同作業　昭５．７

＊　「知徳体」と「３Ｓ」

　三つの「Ｓ」を図案化したバッジが、最近まで湘友会から卒業生に配られていました。この「Ｓ」は、「知育、徳育、体育」を「Ｓtudy」「Ｓpirit」「Ｓports」と言い換えたその頭文字です。この「三育」は、どこの学校の教育目標にも見られるものですが、特にこの「三育」にこだわり、それを教育理念の根底に置きながら、より良い学校づくりを実践し続けたのが赤木先生でした。

＊「火曜考査」と英語の分割授業

　学習の根本は、反復練習にあると考える赤木先生は、授業の上でもいろいろと工夫を凝らしました。中学では進度も早く、内容も難しくなり、授業についていけない生徒も増えるのではないかと考えて、週２回火曜と金曜に国、漢、数、英の四科を順次に考査（試験）し、日頃の学習効果を確かめました。１年後、火曜日だけに改められましたが、この火曜考査は戦後まで続き、生徒の学力向上に随分と役立ちました。

　次に、クラス分割による少人数授業を英語から始めました。後には数学、作業、図画の授業にも及び、これも生徒の学習効果を上げるために大いに役立ちました。ほかに、夏期講習など受験指導も熱心に行われていました。

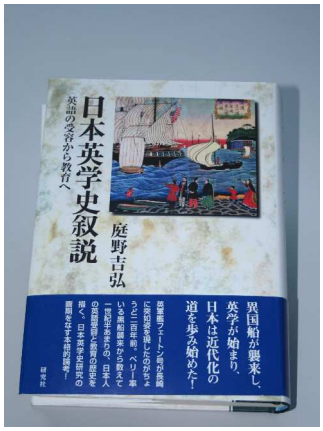
　当時の授業が如何に充実していたかの証となるエピソードがあります。受験を控えた１期生の中に、先輩も居ず東京から離れた辺鄙な藤沢の一中学校で幾らがんばっても果たして外で通用するのだろうか、そうした不安を抱く生徒がいても不思議ではありません。そんな思いの二人の生

徒が、こっそり東京の予備校に行って、その帰り「どうだった？」とひとりが問うと「あの程度なら、学校で十分だな」「俺もそう思う」と、ふたりは二度と東京に足を運ぶことはなかったと言います。

＊岡倉賞・日本一の英語教育

生徒のもっとも取り付きにくい英語については、前述の少人数による授業に加えて、目で文字を追うだけでなく、耳も使い、口にもうったえて理解を深めるなど、個人指導の徹底、読書力・運用力の強化を図る新しい教授法の導入により、その成果には目を見張るものがありました。

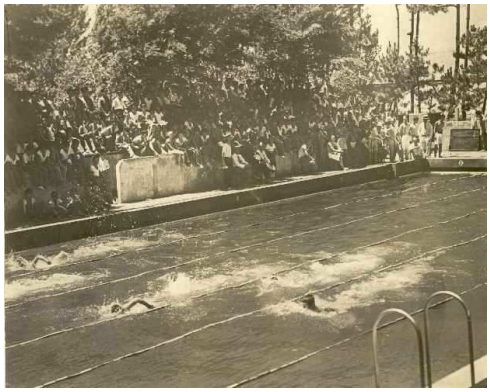
この戦前の先進的な英語授業の取り組みは、英語教育関係者の間で伝説となっており、工学院大学教授 庭野吉弘氏（41 回）は、その著書の中で、「オーラル・メソッド『湘南プラン』の実際――『分割授業』と少人数教育」という題を掲げ、当時の教員へのインタビューも交え、詳しく紹介しています。



そうした実績が全国的にも認められ、それまで英語教育の中心的存在であった福島中学に代わり、その位置に湘南中学がすわることの名誉を得ました。まさに日本一です。それを裏付けるように、1939 年（昭和 14 年）、第一回岡倉賞（英学者岡倉由三郎先生を記念した賞）を授与され、しばらくは、全国から参観者が連日押しかける状況でした。第二次世界大戦中は英語は敵性語となり、中学校の英語教育も行われなくなりましたが、湘南中学では戦時中も途切れることなく続けられました。

＊「自由運動」と「対組競技」

「知徳体」の調和的発達を目指す赤木先生は、学習の面だけでなく、体育の向上にも力を尽くし、生徒にも積極的にそれを奨励しました。「普（あまね）く、絶えず、正しく、強く」をモットーに、選手養成ではなく、生徒のそれぞれが、自分に適したスポーツを選んで実践する。それが「自由運動」として定着し、1928 年（昭和３年）そこから生まれた「対組競技」は現在に至るまで続いています。



全校の汗と力ででき上がったプールで
対組水上大会

対組駅伝大会
（PTA 会報「湘南」2001 年 3 月 5 日号 より）

＊戦時体制そして終戦

1937 年（昭和 12 年）の盧溝橋事件から全面的な日中戦争に突入し、戦禍は第二次世界大戦へと拡大していきました。湘南中学も例外ではなく、国を挙げての戦時体制の渦中に呑み込まれていきました。生徒は動員、教室は空っぽ、疎開の海軍や官庁が校舎を使用する。そうした中、卒業生や職員の戦死の報も相継ぎました。赤木先生は三男の戦病死にも遭い、日ごろ剛毅な先生も悲嘆にくれたと言います。

1945 年（昭和 20 年）８月、終戦。続々と生徒職員も校舎に戻ってきて、赤木先生も気力を新たに、最後のご奉公をと立ち上がりましたが、司令部の厳しい指令による教職追放。本校における草創期から発展期までの 27 年間に及ぶ、苦難に満ちた、そして充実した赤木先生の時代は終戦とともに終わりました。時に先生は 75 歳でした。

後に、先生の 80 歳の傘寿を期に、湘友会が中心となり、今皆さんが目にする胸像が建設されました。その碑文の最後には「・・その徳を慕い恩愛を謝する我等茲に相寄りこの像建つ」と記されています。難しい文字が並びますが、皆さんにも是非全文を読み通して、先生の遺徳を偲んで欲しいと思います。

＊戦後、そして新制湘南高校のスタート

1948 年（昭和 23 年）、旧制湘南中学は新制湘南高校として新たにスタートし、現在に至っています。赤木先生の後、本校は 19 名の校長先生を迎えました。それぞれ立派な教育者として、湘南高校の充実発展に尽くしてこられたことは言うまでもありません。現在の川井校長先生は 20 代目になります。

その間、新しい学制により、それまでのいわゆる中学校の５年制は、高校のみの３年制に変わり、男女共学も始まりました。また、定時制、通信制が併設され、本校も多様な生徒の学舎と変わりました。そうした急激な幾多の変化にもかかわらず、赤木先生の掲げた教育理念は現在も色褪せることなく、脈々と生き続けています。そんな思いから、これから湘南高校生としての新たな生活を始める皆さんに、湘南中学時代、そして、赤木初代校長先生についてのほんの一部を紹介いたしました。

1・2 年女子合同球入れ競技　昭和26年10月